

第1回通訳案内士のあり方に関する検討会の開催について(結果概要)

観光庁観光地域振興部観光資源課

2020年2,000万人時代に対応した受入体制整備のためには、通訳案内士の質及び量の充実が求められている状況を踏まえ、2020年2,000万人時代を見据えた新たな通訳案内士制度を構築するための具体的な方策について検討を行うため、「第1回通訳案内士のあり方に関する検討会」を開催しました。

検討会は通訳案内士団体、旅行業界、宿泊団体、ボランティア通訳ガイド団体、学識経験者等の関係者及び専門家が参加し、事務局から通訳案内士の制度と現状に関する説明や今後の論点の提示等を行い、関係者で議論を行いました。

1. 開催日時、場所

日時:平成21年6月26日(金)10:30~12:30

場所:中央合同庁舎2号館16階

観光庁国際会議室



2. 参加者(添付ファイル参照)

3. 付議資料(添付ファイル参照)

- 委員名簿
- 配席図
- 設置要領
- 通訳案内士のあり方に関する検討会の設置について
- 通訳案内士の制度と現状について
- 通訳案内士のあり方に関する懇談会での議論について
- 今後の論点
- 今後のスケジュール



4. 主な意見

- ・ 2020年2000万人を達成するためには、世界中の方々からデスティネーションとして日本を選んでもらわなければならない。検討に際してはこうした視点をもつことが大事であり、旅行者の満足度向上のためには、ガイドの充実を図ることが不可欠である。
- ・ 通訳案内士に求められる質・役割を考えるにあたって、消費者、すなわち外国人旅行者の視点は欠かせない。語学ができる人がいるから、その人を活用しようという供給者側の視点で考えていると、観光客の満足度向上は図られない。
- ・ 通訳案内士に求められる質・役割は非常に多様で幅広い。観光客によってはいわゆる入門的な案内で十分な方もいらっしゃる一方で、茶道など日本文化の精神性に至る説明が求められたり、また様々な伝統的・専門的な技能を持つ職人さん

による体験型観光に対応したご案内する必要があったり、と様々な知識やスキルが要求される。

- ・ 通訳ガイドであれば、単に語学ができるというだけでなく、できれば各言語の文化圏に関する理解を持ち、日本の紹介をするにしても外国の事物に引き合わせてガイドができるようになることが望まれる。
- ・ 通訳案内士としての質を向上させるためには、実務を通じた経験を重ねることが第一に必要となる。通訳案内士試験は、ガイドとしての最低限の知識レベルを問うものであり、通訳案内士試験に通っただけですぐに通訳ガイドとして仕事が一人前にできるわけではない。
- ・ ガイドとしてのレベルアップを図るためには、研修などを通じた個人の努力も重要。ボランティアガイド団体でも、登録する前段階で、実地も含めた1週間以上の研修が必要となっているケースもある。
- ・ 通訳案内士の数が足りないというが、現実にはガイドに仕事が回ってきていない。通訳案内士の数の増加に伴って仕事がさらに回ってこなくなり、経験を積むチャンスが奪われることになるのではないか。
- ・ 仕事が回ってこない原因をよく分析する必要がある。ガイド活動に関するPR不足であったり、活動機会を拡大するための努力不足であったりするのではないか。ボランティアガイド団体でも、日々活動機会の拡大のための努力を重ねている。

5. 今後の進め方

第2回は7月31日に開催を予定している。その後は概ね月1回開催し、年内を目途に中間とりまとめを行う。その後中間とりまとめについて関係者の方々の意見を聴取する機会を設けるとともに、追加の論点整理を行い、来年6月を目途に最終とりまとめを行う予定。